ゼロである。かなり広い頂上は灌木などなく拓れ果てた十ときやせ草が、霧にぬれてシットリとなつている。

高木会長の依頼により、古藤田氏が姫岳合戦の由つて来るところ、大友、大内の角逐抗争の話を承る。後つて少し早かつたが昼食の弁当を開く。

残念である。立ち込めた霧はさらに濃くなり、少し寒くもなつたので山を下ることにした。足がつかれる程どのこともなく来た道と引きかえし、川原内に駐めていた車に帰る。

帰りに西神野を訪う。紅葉川の源流である谷は深く、まるで高千穂の峡谷を行くようである。

目指す西神野の熊野神社は、紅葉川の流れの向う、石英岩の絶壁の下にあつた。神殿の後ろは洞穴になっているのが珍らしかつたが、獅子の彫刻する神社というので、猪の下顎の骨やも拝殿にかけてあることを予想していたが何一つなく、意外であつた。

境内のあちこちに散在する拓(かや)の原生巨木と、川向うに見えた凝灰岩のきれいな柱状節理の有様が印象的であつた。

今日の現地は、近藤氏は竹製品の買付けに、古藤田氏は推薦の買付けに来られているところ、到る所でお二人から東西神野の人情や風習を承つて、この山深い秘境に心惹かれるものが多かつた。

私には大きな課題が残つた。それは姫岳の戦に於ける彦岳とのつながりである。つまり姫岳—八戸高原—鏡峠—とつないでの、彦岳との連繋で、何かの文献によつて解明したい。そして何時の日にかこの山道を、一日かけて歩いて見たいという願望である。

（おわり）

偶感

山田先生をうしなつて

羽柴　弘

いよう〜、としてこだわるところなく、
黙々と古い文献にしたしまれ、
静かに短歌の道にまでいそしまれ、
人求れば談論風発どどまるところなく
光いたりといえども時代感覚は若者にまけず
豊かに深い人生体験を身につけて、
人間味ゆたかな先生
あゝ、その先生、お友は今は亡い。

私はご恭儀に当り、このようなことばを先生の霊前に手向けた。

先生の歴史に対する多年のご精進、数々の文料を渉猟されて郷土史の大集成は、或は書冊となつて出版され、或は稿本として実に危大なまの残されている。わが史談会もまた多くの原稿をいただき、大半は佐伯史談誌上に掲載したが、尚相当数量のものを私の手許にお預りしている。私はその遺稿を、次々に紙上に掲げたいと、霊前に申し上げたのであつた。

私共は、次々とかけがえのない長老を失つている。柴田勝寅氏、足田泉先生、そして今又山田先生。私共はそのご膝下にご指導を仰ぐ機会を充分に持ち得なかつた。今思いかえして残念である。

幸い史談会は至極簡便なテープレコーダーを購入している。写真も多数な会員が駆使出来る。又電子リコピーの活用の道も拓けている。これらを自由に活用して貴重な存在を後に残したい。

然し、今切実にほしいものは、実は会員七方の時である、余猶である。大勢連れ立つて歩き、多人数して先輩をおたずねすることは、勧めている人の多いわが史談会では出来かねるのが実情である。

そこで人数は言うまい、機会をうまくつかみ、立寄りしては次々に実施しよう。郷土資料は逃げて行かないが、貴重なご存在である先輩、長老の方々は、失礼ながら年一年と衰えてゆく。御使命の今を失つたら、足田先生を失つたように、山田先生が亡くなつたように、わが郷土の人間国宝を失つてしまう。

昭和四十七年の史談会の研修行事は、一層討論史談会を待ちたいと考えるが、いかがなものであろう。

（おわり）

短歌

三本の杉

会員　足田慧声

ごわしたる御殿の跡に佇みて霊長の昔
をしびし偲べり
夕映えの龍王山の片づらは版画のごと
く黒くあざやか
よど祭が燎火はしきりに燃えさかり一
位の幹を紅に染む
最会終え君と帰れば鶴山城跡趾の松は
春雨に煙る
渡越焼窯元訪りし跡に来て友と破片を
見つけ喜こぶ
村里の移ろう姿語るごと数百年経し水
屋のあり
夕霞ただよう御塔(おとう)三本の杉は哀史を語
るごとくに
千代鶴君の自刃せし岩苔むして舞おる
人は今はまれなり

（住所　佐伯市下堅田字西野）